

思いを表現するための効果的な ICT の活用

尾花沢市立常盤小学校 織江 真由美

<研究の概要>

本研究では、思いを表現するための効果的な ICT の活用について考察し、どのような場面でのような方法があるのかを検証した。今年度は、情報活用能力の中でも特に、相手や目的を意識したプレゼンテーション（プレゼン）力を高めることを目的とし、授業実践を行った。

まず、社会科で学んだことを全校児童に伝えるために、資料作成の仕方を確認した。次に、総合的な学習の時間の「大根栽培販売活動」について学んだことを保護者に伝えるために、ICT の有効な活用について実践を行った。さらに、お世話になった地域の人を招待して「感謝の会」を行い、「伝えるたのしさ」について検証した。

その結果、ICT を活用することにより、思考の可視化・共有が容易になり、表現の質が高まることや、目的や相手意識を追究することにより「伝えるたのしさ」を実感することができることが明らかになった。

1 研究テーマ

本学級は、3年生8名、4年生6名、計14名の複式学級である。昨年度は、現在の4年生に対し学習者用コンピュータ端末を使った動画作成やプレゼン資料作成の実践を行い、ICTを活用すると効率的な情報の収集と保存、視覚的な効果等により、思いを表現することに有効であることを実証できた。今年度はさらに、SKYMEMU Cloud¹⁾で以下のような活動を計画し、検証をしていく。

- ・「発表ノート」²⁾を用いた指導者との双方向のやり取り。
- ・「シンプルプレゼン」³⁾や「発表ノート」を用いたプレゼン資料の作成。
- ・カメラや動画機能を活用した情報の収集と蓄積。
- ・Microsoft Teams を活用した投稿、資料の配付、オンラインでの双方向のやり取り

このように、ICT を様々な場面で活用することで、学習者用コンピュータの基本的な操作を身に付けるだけでなく、どのような場面でのような効果があるのかを検証したいと考えた。児童は、学習者用コンピュータを使うことに大きな期待があり、それが学習に対する意欲につながっている。

情報の比較・整理に焦点を定め、思考を可視化・共有することで、自分の思いを効果的に表

現できることに気付かせていきたい。また、修正や変更が簡単にでき、カスタマイズが容易であるというICTの特性に気付かせ、相手や目的に応じて表現する力を高めていきたい。学習者用コンピュータなどのICTを活用することで、「伝えるたのしさ」だけでなく、「自信をもって相手に伝える子ども」の育成につながると考えた。以上のことから「思いを表現するための効果的なICTの活用」というテーマを設定した。

2 研究の視点

- (1)思考を可視化・共有するための ICT の活用
- (2)伝えるたのしさを実感できるプレゼンテーション

3 研究の方法と計画

(1)視点1について

プレゼンを通して、相手や目的に応じて情報を組み合わせて表現する姿を目指したいと考えた。そのためには、作成したプレゼン資料を受け手の目線で校正する必要がある。ICTを活用することで、伝える順序への意識、グループでの思考のつながりが明確になり、よりよい表現の工夫に気付くことができると考えた。

また、指導者がリアルタイムで学習の進捗状況を把握するために、児童の状況を一覧で確認することのできる「画面一覧」を

活用する。タップして個人やチームをピックアップすることもできるので、児童間で情報を共有し検証する際に、新たな課題につながると考えた。

(2)視点2について

事前に「発表ノート」の「資料置き場」に写真データを入れ、児童が必要な写真を選択できるようにしたり、自分の学習者用コンピュータにインタビューの様子を録画したりするなど、容易に情報収集を行うことができるようにする。伝えたい内容に合わせて写真や動画・文字などを選択したり、不足している情報は追加で取材を行ったりして、相手や目的に合わせて情報の取捨選択ができるようにする。

全校児童→保護者→地域の人→保護者…など、年間を通して相手や目的を意識した学習プロセスを発展的に繰り返すことで、「伝えるたのしさ」だけでなく「伝わったたのしさ」を実感できるようにする。

4 研究の実践

(1)実践1

ア 実践の概要

(ア)単元名

3年社会科「市の様子」

4年社会科「県の広がり」

(イ)本時の目標

社会で学んだことをクイズ形式にして全校生に伝えるためプレゼン資料を作成することができる。

(ウ)ICTの活用について

「シンプルプレゼン」を用いて、プレゼン資料を作成する。資料として写真撮影や保存、挿入などを行う。

イ 児童の学びの姿

(1) **視点1** 思考を可視化・共有するためのICTの活用

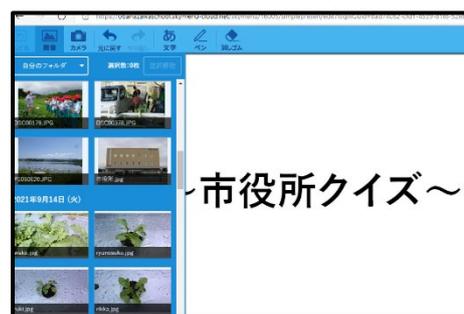
3年生にとっては初めてプレゼン資料の作成なので、昨年度3・4年生が作成したものをモデリングとして提示し、ゴールへのイメージをもたせた。

スライドの構成として「①題名②クイズ③答えと説明」を提示した。複数ページの「発表ノート」のサムネイルで全体を確認

しながらページの追加・削除・順序の変更をすることで思考が可視化され、情報の整理や順序への意識を高めることができた。



撮影した写真は、「教材・作品」から取り出し、「発表ノート」に張り付けることができる。写真の挿入の有無を比較・検討することで、受け手の目線で視覚的な情報の利点に気付くことができ、有効だった。また、どの写真を選択するのかを考えるので、児童間で情報を共有し、発表内容について深く考えるきっかけになった。



(2)実践2

ア 実践の概要

(ア)単元名

総合的な学習の時間

「常盤大根プロジェクト21」

(イ)本時の目標

大根栽培販売活動で学んだことや感謝の気持ちを保護者に伝えるために、プレゼン資料を作成することができる。

(ウ)ICTの活用について

「発表ノート」の「グループワーク」を活用し、複数の児童が同時に編集しながらプレゼン資料を作成する。

イ 児童の学びの姿

視点1 思考を可視化・共有するためのICTの活用

発表資料を分担してまとめるときに、担当以外のページの作業状況が反映される

ので、前後のスライドを確認でき、自分と友達の思考のつながりを可視化することができた。そのことにより話し合う場面が生まれやすくなり、グループで合意形成しながら発表資料を作成するのに有効だった。考えをリアルタイムに共有して活動に取り組むことで、よりよい考えに気付くことができ、児童の考えに変容が見られた。



また、大型画面に提示し一覧にすることで、指導者だけでなく児童も、友達の思考の状態をリアルタイムに知ることができた。そのことにより、指導者と児童だけではなく児童間でも、情報の比較により気付かせたい類似点や相違点に焦点を当てることができた。そして、互いの考えを共有しながら学びを深めることにつながった。

資料の収集と整理の点では、「資料整理箱」を使うことで、大量の情報の共有が可能になり、情報の相互のやり取りが容易になった。



(3)実践3

ア 実践の概要

(ア)単元名

総合的な学習の時間「感謝の会をしよう」

(イ)本時の目標

お世話になった地域の人に感謝の気持ちを伝えるために、プレゼン資料とスピーチの整合性に気付くことができる。

(ウ)ICTの活用について

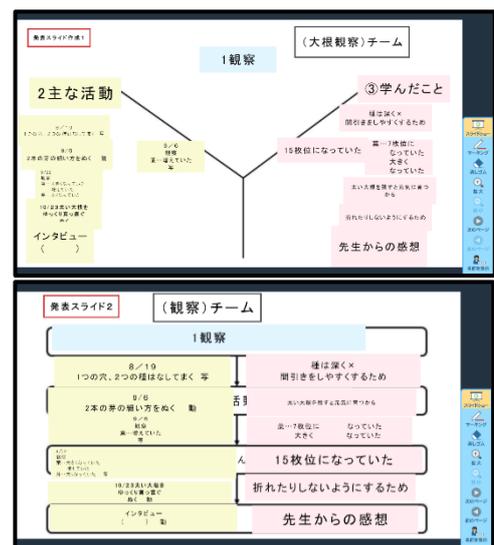
①「発表ノート」用いて、プレゼン資料を作成し、地域の人へ学んだことや感謝の気持ちを伝える。

②Microsoft Teams を活用して、撮影した動画を視聴し合うことで、目的に応じた表現に気付く。

イ 児童の学びの姿

視点1 思考を可視化・共有するためのICTの活用

プレゼンのスライドの順序を考えると、これまでアナログで行ってきた活動を「思考テンプレート」というICTを使った活動に置き換えてみた。順序を入れ替えることが簡単にできるので、伝えたい順序をはっきりさせることができた。また、スライド作成の際に迷ったときなど、目的に合わせて順序や内容を手軽に確認することができた。



視点2 伝えるたのしさを実感できるプレゼンテーション

プレゼン資料を作成する中で、児童は「発表ノート」の文字飾り、図、スタンプ、写真など様々なツールの便利さに気付き取り入れていった。しかし、修正・変更を繰り返すうちに、情報過多になってしまい、かえって大事な言葉や写真、伝えたいことが目立たなくなってしまうという欠点に気付いた。そこで、吹き出しの有無を例にあげて画面を比較させた。情報の取捨選択の必要性、伝えたい相手を意識したよりよ

い表現とは何か考えるきっかけになり、学びが深まった。



修正前のスライド

修正後のスライド

また、自分たちのスピーチを客観的に判断するために、プレゼンの様子を動画で撮影した。動画は Microsoft Teams で共有し、他のチームの動画も視聴できるようにした。動画を見て友達から評価をもらうことで、自分たちでは気付かなかった修正点に気づき、発表資料とスピーチの整合性を確認するのに有効だった。



5 結果と考察

(1)視点1について

- ICT を活用してプレゼン資料を作成することにより、伝えたい情報（写真・動画・文字等）を取捨選択する必要性に気付いた。また、「順序立てる」を意識した思考ツールをデジタル化することで、目的に合わせて順序を整理することができ、思考の可視化の有効性を確かめることができた。
- 思考の過程を画面上で一覧表示したり複数の画面を比較したりして、瞬時に共有することは、類似点や相違点に気づきやすくなり、表現の質を高めることに効果的だった。

(2)視点2について

- グループで学習する際には、「グループワーク」を活用することで、話し合う必要感が生まれ、考えをリアルタイムに共有しながら

ら協働的な学びを深めることができた。

- プレゼンの様子を動画で撮影することにより、自分たちの姿を客観的にとらえ、受け手に合わせて伝えるという目的意識を高めることができた。友達との相互評価での振り返りにも有効的だった。
- 「伝えるたのしさ」を味わわせるために、教科横断的に「伝える」を意識した計画を立て、目的や相手を変えて、段階的、発展的に PDCA サイクルを繰り返してきた。児童は「感謝の会」で、地域の人と交流し、プレゼンへの感想をもらった際に、自分たちの思いが相手に伝わったことを実感することができた。それは、プレゼンを繰り返すことで、初めは一方向だった、思い「伝えるたのしさ」が「伝えられたたのしさ」に変容したからではないかと考えた。

(4)研究を終えての提言

思考の可視化・共有という点で考えると、初めは「思いを表現する＝伝える」ことをイメージして ICT の活用を想定していたが、実践を重ねるうちに、それだけではなく「思いをもつ」ためにも ICT の活用が有効であることに気付いた。「思いをもつ・思いを表現する」ことは、学びを成立させるための根本であると言える。ICT のツールの活用を通して、児童がしたいことや伝えたいことが具現化できたことは大きな成果である。

学習者用コンピュータを活用したプレゼンについて児童にアンケートを実施したところ、全員が「思いを伝えることができた。」と回答し、また「思いを伝えることに自信がもてるようになった。」と回答した児童は、4月よりも大幅に増加した。児童は自信をもって表現できるようになった理由として、家族や地域の人から、プレゼンの内容や構成、発表会での姿勢等を褒めてもらったことを挙げていた。達成感や満足感を味わうことが次の活動への意欲につながることでより明確になった。

ICT を使わなくても思いを表現する方法はたくさんある。しかし、ICT を活用することで、瞬時に情報を共有し、手軽に修正することができ、確実に表現の幅を広げることができた。また、学習者用コンピュータ上で友達と思考をつなげることにより、学習者用コン

コンピュータを仲介にして、よりよい表現について意見を交わし合う場面もたくさん見られ、児童の姿が変容した。

ICT の活用について、「あった方がよいもの」から「なくてはならないもの」へ指導者の意識を変えていくことが必要だと感じた。授業改善のために ICT のツールを道具の一つとして使うことは、児童だけではなく、私たち指導者にとっても必要なことである。これからも研修を重ねて、効果的な活用の仕方を追究し、実践を重ねていきたい。

注

- 1) SKYMEMU Cloud は、株式会社 SKY が開発した学習活動端末支援 web システムである。代表的なツールとして「発表ノート」「シンプルプレゼン」がある。GIGA スクール構想により導入された尾花沢市の学習者用端末にインストールされている。
- 2) 「発表ノート」は、学習者用コンピュータ端末の画面上に線や文字を書き込んだり、画像を貼り付けたりして考えをまとめるツールである。「画面一覧」での表示、教員機に表示した画面の転送、教材の配布や回収、協働して発表資料を作成する「グループワーク」など様々な機能がある。
- 3) 「シンプルプレゼン」は、学習者用コンピュータ端末で撮影した写真や文字を使って、発表資料となるスライドが作成できるツールであり、必要最低限の機能のみを搭載している。スライドに記載できる情報量は、レベルに応じて3段階で設定されており、設定された制限を超えて入力すると警告が表示される。